

戸田貞三と日本の社会学：家族研究と社会調査

- 01 19世紀における社会学の誕生
- ・ Comte, A. (1798-1857)
『社会再組織の科学的基礎』 [1822]
『実証哲学講義』 [1830-42]
- 科学史家コントによる「社会」研究の位置づけ
「三段階の法則」 神学的／形而上学的／実証的
- 02 総合社会学：社会進化論的な大系化
- ・ Spencer, H. (1820-1903)
『社会学原理』 [1876-96]
- cf. 単系的発展論、発展段階論
- ・ Marx, K. (1818-83) の発展段階論
 - ・ Bachofen, J.J. (1815-87) の母権制論
 - ・ Morgan, L.H. (1818-81) の単系進化説
- 03 特殊社会学：実証精神の方法化
- ・ Simmel, G. (1858-1918)
『社会分化論』 [1890]
『社会学の根本問題』 [1917]
 - ・ Durkheim, E. (1858-1917)
『社会分業論』 [1893]
『自殺論』 [1897]
 - ・ Weber, M. (1864-1920)
「社会科学の認識における「客観性」」 [1904]
「資本主義の精神」 [1905]
- 05 新語としての「社会学」 sociologie
コント『実証哲学講義』第4巻 [1839] での造語
「世態学」として。東京大学、1878 (明治11) 年
Fenollosa, E.F. (1853-1908) の講義
後には美術史、文化財行政に関わって有名
スペンサーの社会進化論
- 06 新語としての「社会」
société, society はどう訳されたか？
- (1) 「会」 公会、会社、仲間会社、衆民会合
 - (2) 「社」 結社、社友、社交、社人、社中
 - (3) 「交」 交社、交際、世交
 - (4) 「間」 世間、俗間、人間仲間、仲間会社
 - (5) 「人」 人間、人間道徳、人間仲間、人間世俗、人倫交際
 - (6) 「群・相」 為群、成群相養、相生養（之道）、相済養
 - (7) 「世・俗」 世俗、俗化、俗間、世間、世道、世態
 - (8) 「民」 人民、国民
 - (9) その他 懇、邦国、政府など
- (明治初期における社会の訳語)
- 07 東京大学における社会学の歴史・その1
- ・ 外山正一 (1848-1900)
 - ・ 建部遯吾 (1871-1945)
 - ・ 戸田貞三 (1887-1955)
- 08 東京大学における社会学の歴史・その2
- 「フェノロサ&外山」時代 (明治11-19)
「外山」時代 (明治19-30)
→スペンサーの社会進化論
「建部」時代 (明治30-大正11)
→コントの総合社会学
「戸田」時代 (大正11-)
→特殊社会学の発展
実証研究の登場
- 09 戸田貞三における社会学の転回
- ・ 対象の側面から→家族社会学の誕生
 - ・ 方法の側面から→社会調査論の形成
この二つのからみあいのなかで
- 10 家族研究の誕生：『家族構成』以前
- ・ 家族史は、生活史ではなく制度史であった
法学者や法制史の研究
最初の論文→家の制度史
- 「日本に於ける家の制度発達の研究」 [1913：1巻]
- 「現在我国の家なる制度が如何なる状態にあり、而して是が将来如何なる形に変わり行くや、旧来の家族制は全く崩潰し去るものなりや否やは、実に我國民の經濟上政治上及社会生活上の根本的大問題にして従来屢々有力なる学者諸先輩により論ぜられ、而も尚其解決を見ずして存する頗る困難なる研究題目なり」 [1巻 pp3-4]
- 二章構成。
- 「太古に於ける家の制度」「王朝時代の家の制度」しかし「武家時代」の中世以降に及ばず。
制度変遷の事実の確認を研究の目的としている。
研究資料は、古代史（法制史）家の基本資料と同じものをかなり徹底的に利用している。森岡清美の評価、有賀喜左衛門の『上代の家と村落』 [1943] の先駆。
建部の影響よりも外山の影響
一高時代に読んだ外山「神代の女性」論文
この家族史の関心は『家族構成』にも継続する。

11 背景としての民法改正：「戸主制度」存廃問題

「我国固有ノ醇風美俗」

「戸主制度」→本庄栄治郎の問題提起

家長権を基本とした家を社会構成の単位とする制度

「家族主義」と「個人主義」：家本位と個人本位

臨時法制審議会の設置 [1919]

「先生は、事実の分析に立脚していない議論をすべて「お説教」と呼び、私は「俺はお説教は嫌いだ」という言葉を何遍も聞かされた」（清水幾太郎）〔：別巻 p.231〕

「戸田先生は「オピニオンはだめだ。具体的な事実をつかまなきゃ、だめだ」というんで、卒論でも単なるオピニオンを並べたものは容赦なくふるい落とされました。」（小山隆）〔：別巻 p.202〕

「先生はなんでもいいから事実を扱うほうがいいと言われるのです。」（牧野巽）〔：別巻 p.192〕

「制度」の是非よりも「制度」の実態

「集団」として家族の実態の解明へ

12 1910年代における調査の機運

横山源之助『日本の下層社会』 [1899] 以後

・日露戦争後の格差問題→都市細民層の貧困

内務省地方局の「細民調査」 [1911-12]

世帯を調査単位とする統計的調査

・第一次大戦の物価上昇と賃金のギャップ

高野岩三郎らの労働者生活調査

「東京ニ於ケル二十職工家計調査」 [1916]

「月島調査」 [1919]

○「何故細民が出来るか」 [1917：8巻]

cf. Malinowskiのトロブリアンド研究 [1922]

13 大原社会問題研究所

1919（大正8）年大原社会問題研究所設立

助手を辞めて大原社研で働きたいと建部に言う

米田庄太郎、高野岩三郎に挨拶。

「私の入った頃（大正八年初め）、大原社研はまだ建物もできておらず、愛染園という大原の経営している社会事業団体の構内に貧しい子供を対象にした小学校と幼稚園の木造の建物がありましたが、その中に部屋を借りていました。」〔戸田貞三「学生生活の思い出」1953：14巻 p.178〕

回想録が与える印象以上の研究関心の拡大

・京大の米田庄太郎の調査法の紹介 [1917]

○「生活調査法に就いて」 [1919：10巻]

家計簿式生活調査への期待

・東京市社会局の設置（1919年12月）

大阪市社会部、内務省社会局の設置（1920）

東京市に方面委員制度が設けられる

倉敷労働科学研究所（1921）

→日本学術振興会に寄託・財団法人（1937）

厚生省人口問題研究所（1939）

14 第一回国勢調査（1920）という一大国家事業

最初の「一時点」での直接悉皆調査

世帯を単位に

居住者の全数調査

→このデータが後の『家族構成』の分析に

「丁度都合の良かったことには、内閣統計局で第一回国勢調査（大正九年）をやったことがあり、調査速報を出すために一千世帯につき一世帯の割合で抽出写しというのを作りました。昔は統計に時間がかかったので、そういうやり方をしたのです。ところが、その資料が一万二千程あり、報告してしまえば要らぬものになるので、それを借りて来て使うことを許してもらいました。」〔思い出：14巻 p.181〕

家族という生活集団の研究の基礎に。

しかし、宗門人別帳等の資料への関心は続く

○「家族的生活者と非家族的生活者」 [1925：1巻]

15 戸田の欧米留学（1920年2月～1922年9月）

アメリカ、イギリス、フランス

アメリカに一番長く前後一年半

シカゴ1年、ワシントン2ヶ月、ニューヨーク4ヶ月、

「アメリカ社会学から理論的に学んだところよりも実際の社会現象をつかまえて深く探求していゆくという学風に大いに学ぶところがありました。」〔思い出：14巻 p.179〕

アメリカでは学問上の深い印象・影響

シカゴ学派の社会調査の実践と方法論を学ぶ

16 『社会調査』 [1933]

日本最初の一冊にまとまった社会調査方法論

①全体調査・統計的調査法

②部分調査・選択的調査法

③個別調査・事例的調査法

「分家慣行調査」（1935-）

東京大学での「社会調査室」の活動（1937?-）

大日本職業指導協会の霞村調査（喜多野清一）

文部省社会教育局「壮丁思想調査」 [1941]

日本放送協会「国民生活時間調査」 [1941-42]

世論調査（小山栄三） 戦後のCIE

17 学位論文としての『家族構成』 [1937]

第2章「我が国の家族構成」データ分析

第1章「家族の集団的特質」理論的検討

「感情的融合」「人格的融合」「共産関係」

18 現代社会学の問題意識から

確立期の苦悩・模索を継承すべきではないか

「家族」：制度→集団→場

「社会調査」：構築主義的転回

文献：『戸田貞三著作集』全15巻、大空社、1993